

第21回富山県生涯学習審議会議事録

- 1 日時 平成21年10月14日(水) 13:30～15:30
- 2 場所 富山県庁4階大会議室
- 3 出席委員 結城会長、新井副会長、麻畑委員、磯野委員、伊藤委員、稲葉委員、大橋委員、鹿熊委員、経田委員、小路委員、竹内委員、中屋委員、七澤委員、堀委員、村上委員、吉川委員、和田委員、渡邊委員
- 4 議題
 - (1) 報告事項 「本県の生涯学習施策の概要等について」
 - (2) 協議事項 「本県における今後の生涯学習のあり方について」
 - ・富山広域学習圏における生涯学習機能について
 - ・ふるさと教育について
 - ・生涯学習を担う人材の育成について
 - ・生涯学習情報の提供について
 - (3) その他

◎ 富山広域学習圏における生涯学習機能について

【会長】

富山広域学習圏における生涯学習機能について、皆さんからご意見をいただきたい。

【委員】

県の生涯学習団体協議会は、県民カレッジ学遊祭として、本部のある教育文化会館で学習の成果を発表している。他に拠点となる会場があれば、現在1日だけの発表の機会が3日間くらいになるのではないかという意見が団体の会合で出された。新しい生涯学習の拠点は、できるなら、教育文化会館も活用できるところで、ホール、展示の場所などがあればよい。

【会長】

県民カレッジ学遊祭は、富山地区についてはカレッジ本部で1日の日程で、砺波、高岡、新川はそれぞれの地区センターにおいて高校と生涯学習の部分が協力し、2、3日の期間で、「キャンパスフェスティバル」として開催している。

【委員】

富山県の県民カレッジは、定時制単位制高校と連携して生涯学習を展開しているのが大変ユニークな取り組みである。県民カレッジは、現在、富山に本部があり、3つの地区センターを展開しているが、その3つのセンターと並ぶような形で、新しい雄峰高校とつながった形の生涯学習センターをつくる。また、それが同時に県内の生涯学習のハブセンターという形になればいいと思う。

【委員】

質問だが、現在、高校再編が行われているが、雄峰高校を生涯学習校とするということも高校再編の大きな枠内にあるという捉え方をしてよいか。

【事務局】

今、新しい高等学校5校のことが話題になり、統合の準備も進んでいるが、大本となっているのは「基本計画」というもので、その中に定時制通信制高等学校、特別支援学校の充実もうたわれており、広い意味では高等学校の充実、再編計画の一環と捉えていただいて結構である。

【委員】

会議資料を見ても、県民の生涯学習の中心になる部分が見えない。県の生涯学習構想には、県内4つの広域学習圏に生涯学習校を整備することが書かれているが、現在富山地区にはない。教育文化会館を自分の目でも見たが、面積が狭く、長時間集中してそこで学習

するというのはなかなか難しいと思ったので、ハブすなわち中心となる学習センターを雄峰高校でつくるという方針は大変結構だ。

【委員】

広域学習圏では富山地区のみ生涯学習校が設置されていない。雄峰高校に県民カレッジの本部機能と地区センターを集めて開設することになると、富山市民大学の大手町の市民プラザや大沢野生涯学習センターなどとも連携していただきたい。一定の若い人たちのためだけではなく、今後、超高齢社会となっていくので、全ての年齢層の人たちが対象の生涯学習の分野では受講者の足の確保というか、交通の便のことも考慮して新しい拠点となる雄峰高校を設置してほしい。

【委員】

私も雄峰高校は必要であろうと思う。学びの機会というのはいろいろあってしかるべきであり、定時制単位制高校は大変必要である。そういう意味でも、地区センターを高校と併設するような形になればよい。駐車場の問題と若い年齢の人たち、仕事についての人たちをどう生涯学習に取り込むかということが今年の審議会から話題になっていた。高校の授業終了後、夜遅くまで生涯学習の場として使えるような夜学も可能な拠点であればよい。県民カレッジという生涯学習センターがあることを伝える場としても、私は新しい雄峰高校がほしいと思う。

【委員】

P T Aの立場から話をさせていただく。子どもたちを持っている親の年代からすると、生涯学習というのは、年配の方が行くところであり、子どもを育てている世代はなかなか行かないというのが現状だと思うし、私らの周りでも、生涯学習の場で学んでいるという方は少ない。育児とか仕事で本当に一生懸命で、子どもの教育のことには熱心だが、自分のことにまでまだなかなか手が回らないという状況だと思う。しかし、子どもに対しての学びの場というのは親も熱心なので、生涯学習の中に親子で学べるような場を入れていけば、若い世代の方も入ってきて、子どもから手が離れたとき、またこのような学びもあるということがわかり、よいと思う。

【委員】

通信制の学校で学んでいる者の立場として考えたときに、学びの場はそれぞれあって、ライフサイクルで得ていかなければいけないものもあると思う。今回、雄峰高校の改築、県民カレッジ地区センターの併設の話題が出ているが、ライフサイクルに応じた学びの場の提供ということが必要ではないかと思う。そういうことも情報発信していき、子育て世代の人たちも、子育てが終わった世代の人たちも、みんなで一緒に学んでいこうという場所があればよい。

【委員】

昨年度まで富山県高等学校P T A連合会の会長を務めていた。子どもたちにとって問題になっていたのが、将来を切り開く意欲が非常に低くなっているということだった。諸外国と比較すると統計的にも顕著に現れる。生涯学習校の中で、学ぶ意欲を持った社会人の方々と高校生と一緒に学び合うことにより、様々な触発を受け、自分はこうなりたい、あなりたいというものが高校生にも自然と見出せるようになってくるのではないかと思う。ほかの3校とぜひ深い連携をとってもらい、富山にハブ機能を持った生涯学習校を、機能的に充実した教育内容のものとしてつくっていただければと思う。

【委員】

私たちは地域において、婦人会活動、地域活動として、女性学級等を開設しながら、広く学びの場を開設しているが、なかなか他の団体とのネットワークを結ぶことは難しい。先ほどから他の委員のご発言にもあるように、特に若い人との交流の中で学ぶことが非常に困難な状況がある。だから、生涯学習校で、高校時代に社会人とともに学ぶ機会をもつことは貴重な体験になると思うし、ぜひ雄峰高校に県の生涯学習の中央のセンターとしての機能を新設していただければありがたい。また、婦人会等の活動は昼間ほとんどできず、

学びも活動も夜しかできないという現状である。これは、婦人会のみならず各種団体の現実だと思うので、夜も学ぶことのできる場、夜学も可能な地区センターであることを望む。

【委員】

生涯学習に一步踏み出そうと思っている人たちが多数いらっしゃるの、いかにPRしてその方たちの背中を押してあげるかということも大切だと思う。やはり一歩がなかなか踏み出せない人のために、誘うというのか、背中を押すことをどなたかにぜひお願いしたいと思う。それから、県の力を借り、もっと気軽に入りこみやすいPRを考えていただきたい。組織の力で生涯学習に一步踏み出そうとしている人を見つけたら連携して誘うなどして、このすばらしい講座の受講者が少しでも多くなることが活力になっていくと思う。

【委員】

公募委員として出席させてもらっているが、かつてしばらく新川地区センターに勤めていたので、高校生と一般の人が一緒になって学ぶというのは非常にいい機会だと思う。だから、このような生涯学習校はだれもが参加できるように身近なところにあったほうがよいと思う。そこにいらっしゃる方はほとんど年配の方だったが、新川地区センターでは、夏休みに唯一親子の学習の講座を開催していた。本当に和やかな雰囲気、いろいろなことを学ぶことができ、特に自然の中で学ぶ機会が重要だと思った。先ほどPTAの代表の方がおっしゃったように、これからは親子で学べる場も大事にしてほしい。また、もっと身近なところ、たとえば各町内にある公民館とかを利用した講座も開けるような状況になればいいと思う。

【委員】

雄峰高校を生涯学習校にすることについては、ぜひ実現していただきたいと思うが、県民カレッジ条例を見ると、カレッジにも運営会議、それから地区センターにも運営会議がある。今度、生涯学習校と連携しながら成果を上げようというときに、カレッジの本部機能・地区センターと雄峰高校という関係でこれから進めていかれると、高校の運営会議と齟齬はないと思うが、長い間には考え方が違う場合もある。縄張り争いではないが、学遊祭の発表とか若い人たちの交流とか、考え方が違うとうまくいかない場合もあると思うので、事前によく検証していただきたい。

【委員】

私は生涯スポーツに携わっていて、スポーツを生涯を通じてやっていくということを目的にしている。いつもスポーツをしながら思うが、スポーツをする場所と文化的な場所がつながっていればいいと思う。ほかの県に行くと、体育館の横で美術品の展示会が開かれていたりしている。それから、資料では、生涯学習の広域学習圏が4つに分かれていると書いてあるが、これは富山市の人が砺波地区へ行っても大丈夫なのか。

【事務局】

全く差し支えない。

【委員】

それから、勉強をしながら様々な能力を身に付けていく中で、富山県なら富山県の中だけでなく、県外の方たちとの交流や、勉強の競争があってもいいと思う。また、何か楽しみがないとなかなか学びが進まないのではないかと思う。県内では、サンシップで俳句の会と古典の講座に参加させていただいているが、県外へ視察に行ったりするのが楽しみで、参加希望者がバスに乗り切れないという状態である。やはりそういうように、楽しみながら学んでいくというのも一つであると思う。

【会長】

私は高等学校に勤めていたのだが、学校側、教員側からすると、生涯学習校に大人の方がいらっしゃるの、大変ありがたい。大人の方によって子どもたちが育てられる面がある。大人の方には、この行儀の悪い子どもたち、と思われる部分もあるかもしれないが、そういう子どもたちの実態を見ていただくのもよい機会だと思う。また、生涯学習の部分が学校とつながっていると、さまざまな生涯学習を学校が提供できる。スポーツもそうだ

が、最初に考えられるのは、絵や音楽など、芸術を学ぶ講座である。そのほか一般の学習についても、様々な形で高校の教育機能が提供できると思う。

それから、生涯学習を提供するのは、県民カレッジだけではなくて、例えば生涯学習団体協議会、県民カレッジの友の会である雷鳥会など、私ども機関とその周りのサポーターの方々が一緒に様々な生涯学習を提供しているという実態がある。生涯学習機関の整備と併せ、生涯学習を支えるサポーターの育成をしていくことが大切である。

◎ ふるさと教育について

【会長】

次に、ふるさと教育について、皆さんからご意見をいただきたい。

【委員】

公民館連合会では、公民館講座の内容として、地域プライドを入れてほしいと言っている。人物であれ、歴史であれ、自然であれ、各地域には大切なものが多くあり、大切にしていけないと、ふるさと教育にはならない。最も大事なものは、大人だけではなくて、子どもたちに自分のふるさとを大切にすべきだということをお伝えしなければならないと思う。そういうことを教育の場で考えてほしい。会議の資料に書かれている、ふるさと教育関係のことは全部同感だ。どんどん進めてほしい。

【会長】

子どもたちに対するふるさと教育、生涯学習におけるふるさと教育、いろいろあるわけだが、県民カレッジには映像センターがあり、何十年も前から視聴覚の様々な教材をつくっている。最初はスライドから始まり、8ミリ、16ミリというふうに進んでいき、現在ではDVDとして制作している。今年度は立山の砂防に関する作品、去年は高岡開町四百年にちなんだ作品を制作した。また、旬の映像と名づけて、最近の季節的な映像を撮影している。生涯学習の各種の講座でさらに活用を図りたい。

各種の講座は、皆さん方に興味を持っていただくためには、県民カレッジ各地区センターでは、その地域の食文化を扱ったもの、生涯学習団体協議会による教養講座で、例えば八尾の文化について検証を行おうとか、大変地域のものが多い。今後これをどうすればいいかと思っている。また、先ほどのご発言にもあったように、子どもたちにどうやって広げていくかという課題もあると思うが、何かよいお考えはないだろうか。

【委員】

ボーイスカウトの事務局の仕事をしているが、例えばボーイスカウト活動の中で、歴史に合わせたもののストーリー展開ということでハイキングをすることがある。そういった富山県内のいろんな歴史や自然などを生かしたものでプログラムを展開していくことによって、子どもたちが体で覚えていけばそういった知識も身につくと思う。また、子どものときにふるさとという思いがなくても、それが大人になったときに、「ああ、やっぱり富山っていいんだな」という気づきが出ればそれでいいと思う。私自身も大学へ進学し初めて富山を離れて、富山っていいところだったんだなというふう感じた。ボーイスカウトの活動のことでお話しすると、海外派遣などで富山を離れて日本や富山を紹介しなければいけないときに、自分があまりにも富山のことを知らなかったということに気づくので、そういう経験を踏んで少しずつ富山を語れるようになっていけば、みな富山を愛すべき大人になると思う。

【委員】

ふるさとについての教育というのは、ふるさとにとどまるにしても、そこからまた他の地域に行くにしても、人間の生涯を考えたときの原点になることであり、大変重要だと思う。会議の資料を見ながら、一つ大変注目したところがある。資料10の4ページに「富山県における『ふるさと教育』の現状」という項目があり、全国学力・学習状況調査の結果も出ている。特に秋田の場合、小学生、中学生のふるさとについての関心度が全国1位に

なっている。学力でも秋田は全国1位である。富山ももちろん高いが、秋田県が学力が高いということについては、ふるさと、自分の生きている地域に対する関心の強さと学力というのは無関係ではないと思う。ふるさとを学ぶということについて、様々な形で推進をしていくことが今後ますます必要だろう。

それから、これは後の議題にも関連するが、生涯学習に協力できるような人材をどのように育成していくかということもあると思うが、富山県ではふるさと教育に既にいろいろ取り組んでいて、さらにこれを発展、充実させていくことが重要である。それが、子どもたちの広い意味での学力にもつながっていくのだという認識を持って進めていくのがよい。

【委員】

資料10の4ページ最下段に、小学校では、県の小学校教育研究会が編集をして、県の教育会が発行した「きょう土のすがた」、「のびゆく富山県」という教材が作成されていることが載っている。中学生のものについては発行されていないということだが、中学生が共通して使えるような郷土資料があれば、一般の方々のふるさと再発見というような講座の中でも、テキストとして使えるぐらいのものになると思うので、ぜひ中学生版というのをつくっていただければありがたい。

【委員】

私自身、自分の根っこが日本にある、あるいはこの地域にあるということを感じた。ふるさとに対する愛着や誇りがわいてくると同時に、もっと自分自身、この地域のことを知らなければいけないというような思いも持つようになった。ふるさとのことをもっと知りたいとか、ふるさとのことを知ってそれをだれかに伝えるような人間になりたいというニーズは必ずあると思う。また、社会人が自分の地域のことをよく知り、またそれを伝承していくようなことになれば、それぞれの地域がより活性化し、あるいは成熟していくと思うので、ぜひ生涯学習におけるふるさと教育を大いに推進していただきたい。

【委員】

富山大学の地域連携推進機構の生涯学習部門に所属している。先ほどからふるさと教育に関する他の委員の様々なご意見を拝聴し、まことに同感である。ふるさと教育に関して、やはり教材というものが重要だ。それに関しては、富山県が、特に中学校、高校で使えるような歴史あるいは自然に関する教材をつくっていく作業が必要だろう。県内にはいくつかの大学があり、様々な研究者がいるので、動員して教材をつくっていくことが重要だと思う。

資料10の6ページに特色ある取り組みという項目で、本学の取り組みが出ている。人間発達科学部の例もあるが、例えば理学部では、学生の必修科目として、環境について学ぶ授業を行っている。そのような中で、やはり富山県で学ぶ教材の問題が関係してくるので、このあたりは小中高、それから大学までを含めて、県のほうで系統的に教材づくり、それから教員養成まで含めた方針を持つ必要があるのではないかと感じる。

【委員】

私は舞踊の教室を開いていて子どもを預かっているが、体験して得たものは記憶に残るし、五感で感じたものこそふるさとを感じるができると思う。子どもたちに水でも山でも何しろ体験させてほしい。体験したものが自分の体に残って、それがふるさと教育につながる。だから、私たちの年代の者が考えると、あまり体験していない人が多いのだと思う。情緒面からふるさとの大切さの理解につなげることが大切であるし、実際に苦労して得たものは残るものだ。

◎ 生涯学習を担う人材の育成について、生涯学習情報の提供について その他生涯学習全般について

【委員】

質問だが、はつらつ学びのリーダー育成事業で、育成するリーダー像というのはどういうものか。

【事務局】

団塊の世代の人たちが地域で活躍でき、今までの身に付けてこられた知識とか経験とかノウハウを地域に還元できるようにさせる人材育成ということである。公民館など、できるだけ自分の住んでいる地域で、講演をしたり、あるいは会合の司会や様々なお手伝いをしながら、地域の中で活躍する人材を養成するために設定されたものである。

【委員】

団塊の世代の方が対象ということか。

【事務局】

団塊の世代だけではないが、大体そういった、これからまた頑張っていたきたいという世代の方を含んだ方が対象である。

【委員】

生涯学習を様々な世代の人が求めているというのは、同感である。ただ、今までの議論の中で出てこなかった年齢層で、働き盛りの人たちの話題がなかった。例えば30代、40代の人たちについては、まさしく自分の仕事に直結するような学びをする機会がなかなかない。行政の中で企業と連携し、県内の高等教育機関がお手伝いできるような、企業の活動をしながらも学習できる機会をもてる仕組みをつくってほしいと思う。

それは、先ほどからふるさと教育とかいろいろなキーワードで出てきているが、生涯学習は学びの器づくりだと思う。情報化時代なので、知識は様々なところから入手できるが、器をどこでつくるのかといえば、これは人と人のつながりの中や、地域社会の中でないとつけれない。企業の人たちでさえも専門性以外にそういうものを求めている。これこそ生涯教育の部門であると思うので、そういう仕組みを富山県のどこかでつくってほしい。

【委員】

今のご発言を聞きながら、県民カレッジの自遊塾はまだまだ知られていないと思う。自遊塾は、働く人たちに対して、それから子育て中の方々を対象にする講座が必要であるということで作られた講座である。私たちは、仕事を終えて自分で学びたいという人々を対象に考えていたので、自分の講座は夜の時間設定になっている。土日などにも講座を設けたが、もし企業との連携ができるようになれば、企業何社かが集まって受講者を集めると、そこで異業種交流とか、自分の会社を超えた人間関係ができたりすると思う。

【委員】

機会はたくさんあるし、情報も恐らくたくさんある。私が言いたいのは、企業が勤務中に社員を出すときの助成までするぐらいにしてもいいと思う。そうすると研修に出やすい。もっと進んだ形になると、何年間か他の機関で研修し、また元の職場に戻ることができるという仕組みを取り入れる。社員の意欲に頼るのではない、金銭的な助成や補てんは、個人の努力ではなかなかできない。何年後か何十年間後かに実現するかわからないが、そういう社会が本当の意味での知の循環型社会だと思う。

【委員】

資料8の3ページの「『知の循環型社会』の構築」の図で、真ん中の右側の部分というのは比較的仕掛けやすく、実践されている部分だと思う。先ほど、ご意見が出ていたのは左側の部分、例えば「社会の要請」ということだと、高校あるいは大学卒業までにそういったことはきちんと身に付けて出てきてほしいのだが、現実には各市町村でも生涯学習を展開すると、働いている人はなかなかそういった場に出ることのできない体制にあり、どうしても高齢者の方が中心になってしまう。社会の体制、企業の体制が一つネックになってい

るという実感がある。

【委員】

生涯学習の講座など多数開かれているが、開いているところに来てください、出向いてくださいという場なので、やはりそこへ行くには後押しが必要だ。なかなか行けないのであれば、そして、もし本当に生涯学習の輪を広めたいというのであれば、来てもらうのではなく、逆に企業に出向くということも必要であると思う。例えばふるさと教育の場においてどんなに教材がつくられていても、学校の現場では、先生方はそれを用いることがおそらくなかなかできないと思うので、そこに生涯学習を結びつけるのであれば、やはりそれに長けた人が学校に出向いて出前授業をするなど、待っているのではなく、出向くということも必要であると思う。

【委員】

専修学校各種学校連合会という団体から出てきた。従来は、自分のよって立つところを否定することからスタートして目覚めるという手法がかなり強かったように思う。しかし、それはもう卒業して、先ほども他の委員も発言されたが、やはり県外へ出て、外国へ行ってみて振り返ったときに、自分のよって立つところを質問され、初めて自分がどれほどふるさとを知らないか、自分を知らないかということに嫌というほど教えられて、ようやく何か始めてみようとする、どこへ行っていいかわからないという状況がある。まちなかは空洞化し、集落は本当に高齢化が進行し、地域の状況が転々と動いていくこの時代である。そういうときに、新しいまちづくりとか、これからのまちづくりとか集落の再生といったことまでも視界に入れていただきながら、気づかれた方々から行動していただくしかないと思う。

【委員】

現在、超高齢社会ということがさげばれているが、県の老人クラブ連合会は60歳から加入することになっている。60歳で老人というのはあんまりだと思うが、たとえば老人クラブなどであれば、年配者の知恵を生かす機会や場の設定など、生涯学習では、いろいろな団体を活用していくことが大切である。

【委員】

県民カレッジの生涯学習団体協議会をもっと活性化することができないかと思う。そうすると、ふるさと教育にも生かせるし、リーダーの養成にも役立つと思う。生涯学習団体協議会に加入していなくても、地域には自然、歴史、文化を研究しているグループがたくさんあるので、それらを取り込んでいくと、出前講座にも活用できるし、体験的な活動なども、大きな街まで行かなくても、公民館活動などに地域で生かしていけるような気がする。地域で活動している人たちがたくさんいらっしゃるの、そういう方々に働きかけて生涯学習に生かしていけばよいのではないかと。

【委員】

他の委員から、学校のほうに出向いて生涯学習に協力することが必要ではないかというご指摘があった。しかし、学校の方は、いろいろ調整が必要であったりして、勝手に出向いてこられると迷惑だということも現実にはある。今、図書教材研究センターという財団が東京にあり、私は副理事を務めているが、教育支援コーディネーターという資格をつくることを始めている。基礎的な資格から、様々な分野があり、教材作成ができるような人材を育成する研修会を開き、それを受講した人が学校と協力し合えるような体制をつくらうとしている。学校を支援していくことも必要だと思うが、そのために人材を育成していくことがこれからは必要であると思う。

【会長】

本日出席の委員から多数のご意見、ご提言をいただき、感謝申し上げます。また、事務局には、本日の各委員からのご意見、ご提言を新しい雄峰高校をつくり上げるというような事業も含めて、施策の中で生かしてもらいたい。以上で本日の任を終えさせていただきます。